

# 第32回日本意識障害学会参加報告

地域医療連携室 主任 言語聴覚士 北村 広志

2024年7月26日・27日に、第32回日本意識障害学会が名古屋市にて開催されました。

この4年間は毎年、松山市民病院のナスバ病床関連から一般口演で参加しています。今回の発表者は作業療法士の餌原主任、演題は「チームアプローチにより遷延性意識障害から脱却へ到った1例」でした。その内容は、長期のリハビリテーションの有効性と、多職種からの最新情報を定期的なカンファレンスで更新・共有する必要性についてでした。他の発表者からは、最新機器を使用した症例報告やADLに対する看護の視点での発表などが

ありました。これまで何度か参加しておりますが、発表者の職種に偏りが無い学会と感じています。

企業展示では、ブレイン・マシン・インターフェースの体験がありました。センサーの付いた特殊な帽子をかぶり、非侵襲で脳波を読み取り、その脳波を脳波スイッチとして使用することで、介護の要望などを描画した複数の絵カードから一つを選択するという体験ができました。言語や身振りを伴わないコミュニケーションが可能となること未来を、感じることができました。



山本理事長 餌原主任 筆者

教育講演では、中部脳リハビリテーション病院の篠田院長の意識障害に関する講演があり、外的環境を全く認識出来ない「植物状態（無反応覚醒症候群）」と外的環境をわずかでも認識出来る「最小意識状態」との鑑別に関する話がとても印象に残りました。

この日本意識障害学会は日常の現場における疑問やひらめきの発表だけでなく、最新の脳科学に触れることができるという特徴があります。興味を持たれた方は是非参加をご検討ください。

この日本意識障害学会は日常の現場における疑問やひらめきの発表だけでなく、最新の脳科学に触れることができるという特徴があります。興味を持たれた方は是非参加をご検討ください。



脳外科医師の回診



背面開放座位・ADL練習



免荷式歩行器で歩行練習



NICD（生活行動回復看護）



唱嚙練習  
発表スライド



院内イベント（夏祭り・動物と触れ合い）

# 第74回日本病院学会 in三重県津市参加報告

総務課 主任補 図書室司書 松長 聡美

2024年7月4日より2日間、津市にて「第74回日本病院学会」が開催されました。本会は各専門領域の学術集会とは異なり、全ての医療職が日頃の取り組みや研究の成果を発表、情報・意見交換および交流を通じて、医療の質を高め合う場となっています。

当院は毎年多職種十数名で参加しており、今年は、看護部、薬剤部、リハビリテーション室、地域医療連携室、図書室より、一般口演2演題とポスター3演題を発表しました。

図書室は、資料・場と利用者を結ぶ工夫、資料・環境整備、学術支援など、これまでの取り組みを

ポスター発表しました。これに対し、病院長、理学療法士、看護師など様々な職種の方々から質問を受けました。中には自院の図書室運営にもどかしさを感じている方もあり、当室の取り組みが参考になったようで幸いです。

さて、今年のメインテーマは「常若：継承と刷新の医療システム - 超高齢社会、(労働力)人口減少社会の医療を展望する -」。「常若(とこわか)」は、1300年続く伊勢神宮の式年遷宮にまつわる言葉だそうです。新陳代謝を繰り返して常に若々しくあり続ける。医療を取り巻く環境および情報は、高速化複雑化しています。情報をアップデートし、日々の研鑽を支援することで人材育成を図るため、病院図書室は存在します。

「図書館学の五法則」に「A library is a growing organism.(図書館は成長する有機体である)」という言葉があります。新しいものを積極的に取り入れ、常に成長を続ける。まさに図書室も司書も「常若」であってこそ。改めて病院図書室の存在意義や役割を認識し、背筋の伸びる思いです。



ポスターと筆者

